手候間今明日中可死去之由、只今落來者共申事候。昨日重而被成御働御館際、無一宇被燒拂、御館之儀落居被詰御覽候間、押付有御陣取可被討果之由候。偖又上田(越後)表之儀、樺澤地北條安藝守(高廣)相蹈候。上田三庄之御人數押詰、二三之廻輪迄燒拂、巢城斗成置、二百餘人討捕之、到今日取詰候間、落居無疑之由追々御注進候。隨而其國御助勢之儀、此節極候條、國衆其外各へ有御異見、一刻も早く御出勢、被遂御本意候樣御馳走肝要候。自然此段國衆於疑心者、自我々誓紙差越申候間、各へ爲見可被申由御意候。次貴殿淵底如御存知、我等事御當代之御厚恩無之、又者謙信樣御代も別而之御芳恩雖無之候、謙信樣御墓所與申、爲御國存、旁以捨在所抛身命晝夜馳廻候。況貴殿御事者、御分國一人共無之歟與見及申候。然者御當代有御見除者、自他國之覺不可然候歟。此儀雖不及申候、猶以有御鹽味、景勝樣引立於御申者、謙信樣御孝儀與申、又者御安全之事、貴殿御名譽可罷成候。千言萬句御館之儀落居眼前之事候間、早速御加勢專一候。於巨細者、彼證人衆付副候方々具可申理之條、不能詳候。恐々謹言。

五十公野因幡守
重　家
竹俣三河守
慶　綱
新發田尾張守
長　敦

(朱書)天正七
二月三日

鯵坂備中守(長實)殿

三月十三日。一宮光基、田所源次郎に、鹿島郡能登部免田壹町を耕作せしむ。

一六二四

【乘念寺文書】　鹿島郡

能登部免田壹町田年貢米之事、本年貢米拾參俵ニ候へども、もん田ふさく申、其上謙信打入より作人無之付而、別作憑入、拾俵分ニ末代相定申付候。於此上者、誰哉之者出候て、本作之筋目申輩候共、退轉之所以馳走田地作之事候間　末代共ニ可爲作職者也。仍爲後日下狀如件。

(能登部)
但升のとべ判ニ四斗入也。此内四百文本役有り。

天正七年三月十三日

一宮式部大輔
光　基　在判

のとべ
田所　源次郎

（一宮式部大夫の名は、永正二年十二月五日の條にも見ゆ。但し光基と別人なること勿論なり。）

四月廿五日。上杉景勝、鏑木頼信に、當年初秋越中に出馬すべきことを報ず。

一六二五

【北徵遺文】

來札披見喜悅、仍而當表(越後)備之義、仲春朔館押詰、彌生廿四日三郎(上杉景虎)速切腹、其以來仕置如前々一統ニ申付候條、可被心安候。然而越中初安城凶徒少々相支候間、必初秋出馬案中候。其節急度出陣肝要候。恐々謹言。

(天正七年)卯月廿五日　　(上杉)景　勝　在判

鏑木右衞門(頼信)尉殿

五月十二日。織田信長、長連龍に、今秋自ら出馬すべきことを報じ、併せて溫井景隆・三宅長盛に對し遺恨を懷くべからざることを告ぐ。

一六二六

【長　文　書】　金澤

尙々三宅(長盛)・溫井(景隆)其外國々共(者カ)、内々無別條候由聞屆候。併可爲忠義次第之條、最前之儀聊不可貽意趣候。

爲音信書狀、殊刀一腰貞宗到來候。懇志悅入候。仍能越賀之趣委細得心候。來秋必令出馬、如存分可申付候。成其意萬方無油斷、調略專一候也。謹言。

(天正七年)五月十二日　　信(織田)　長　印

長　孝　恩　寺

（文中に來秋とあるは、來るべき今年の秋の意にして、來年の秋にはあらざるべし。）

五月廿四日。上條政繁、珠洲郡の飯田與三右衞門尉に、その上杉景勝の越後平定を賀したるに答謝す。